



平成27年度 障害者の芸術活動支援モデル事業

学校卒業後の障害のある人の地域での 表現活動に関する調査と実践



目次

1 はじめに 3

2 概要 4

- 1) 調査 4
- 2) 試行プログラム「オープンアトリエ」 6
- 3) アートサポーター養成講座 7

3 報告 8

- 1) 調査 8
 - A. 奈良県内の養護学校へのアンケート調査およびインタビュー調査 8
 - B. 奈良県内に住む人たちが通える地域の絵画教室へのアンケート調査およびインタビュー調査 12
 - C. 奈良県東部、南部の福祉事業所へのインタビュー調査 14
- 2) 試行プログラム「オープンアトリエ」 15
 - 1、mirumiru 16
 - 2、わくわくポン！ 19
 - 2-1 パラシュートをつくってとばそう！ 19
 - 2-2 ポンポン人形をつくろう！ 20
 - 2-3 ペットボトルをつくろう！リリアンあみ 20
 - 3、印象のまなざし 23
 - 3-1 記憶をつくるー私の宝物ー 23
 - 3-2 音を描く 24
 - 3-3 空間を奏でる 24
 - 4、ふれあう大地のおすそわけ！ 27
 - 4-1 土と湯気のダンス！踊って満足！食べて満腹！ 27
 - 4-2 綿でかわいいオブジェをつくろう！ 28
 - 5、オープンアトリエ報告展 31
- 3) アートサポーター養成講座 32
 - 1、展覧会の企画・実施 32
 - 2、レクチャー 35
 - 3、創作サポート 38
 - 4、アートと著作権について学ぶ研修 41

4 今年度事業における課題と提案 44

1

はじめに

たんぽぽの家では、厚生労働省「平成 26 年度障害者文化芸術活動支援事業」において、主に奈良県内の障害者の芸術活動の現状と、支援者等の抱える課題を多面的に把握することを目的に、1) 障害者や支援者に対する調査と、2) 市民の関心に対する調査を実施した。これらの当事者、福祉事業所、市民に対する調査から見えてきたニーズをもとに、支援者の知識や技術のレベルアップのための研修、著作権に関するセミナー、参加型の展覧会や、美術の専門家の監修による展覧会を実施した。一連の取り組みを通して、県内のアート活動に関するさまざまな課題を顕在化し、具体的な支援に近づけることができた。上記の調査や昨年度開設した「障害とアートの相談室」によせられた相談から、学校卒業後のアート活動へのニーズの高さが明らかになった。そこで今年度は以下の5点に力を入れて取り組むこととした。

- ① 学校卒業後の芸術活動のサポートの場づくりのための調査及び試行プログラムの実施
- ② 多様な障害のある人に対応する支援方法の研修
- ③ 奈良県東部、南部への調査やネットワークづくり
- ④ より多くの人に障害のある人の表現に触れてもらう機会づくり
- ⑤ 調査や研修を通して、奈良県内の取り組みにとどまらない全国的な提案

具体的にはまず、奈良県内の養護学校（奈良県では養護学校との名称になっている）と地域の絵画教室に調査を実施し、地域のなかで障害のある人がアート活動を行うためには何が必要かを明らかにした。また、奈良県内でも文化的な資源へのアクセスが難しい中山間地域にある奈良県東部、南部地域の福祉事業所へアート活動の取り組みに関する調査を行った。

これらの調査結果をもとにして、奈良県内の4カ所の地域において、地域の創作活動「オープンアトリエ」の取り組みを試行的に実施した。オープンアトリエの実施に伴い、アートサポーターの養成を行った。

これらの取り組みを通してみえてきたことは、地域には障害のあるなしにかかわらず、誰もが自由に表現できる場が必要であり、その表現活動の場にアクセスできることが必要であるということだ。また、障害のある人のアート活動を支援したいと考えている人も地域にいるということがわかった。

今回の報告書は、地域での実験的な取り組みをまとめたものだが、表現したい人と場所、支援をしたい人、そして地域の資源、そうしたものをつなげる仕組みを今後も継続して考えていきたい。

1) 調査

障害のある人は特別支援学校卒業後に企業へ就労したり、アート活動に取り組んでいるわけではない福祉施設に通所した場合には、その後アート活動に参加することが難しくなる。地域のなかでどのように芸術文化活動に参加できるか、課題とニーズを明らかにし、提案をまとめることが本調査の目的である。

以下 3 つの対象に焦点をあてて、アンケート調査および、インタビュー調査を行った。

- A. 奈良県内の養護学校（奈良県では養護学校との名称になっている）へのアンケート調査およびインタビュー調査
- B. 奈良県内に住む人たちが通える地域の絵画教室へのアンケート調査およびインタビュー調査
- C. 奈良県東部、南部の福祉事業所へのインタビュー調査

A 奈良県内の養護学校へのアンケート調査およびインタビュー調査

目的：養護学校ではどのような美術教育が行われているのか。学校の時間以外を生徒はどう過ごしているのか。また卒業後、生徒のアート活動を続けたいといったニーズを先生たちはどう考えているのか等を明らかにする。

方法と対象：アンケート 13 校

インタビュー 6 カ所（養護学校 4 校、元養護学校教員 1 名、自立訓練事業福祉型専攻科 1 校）

B 奈良県内に住む人たちが通える地域の絵画教室へのアンケート調査およびインタビュー調査

目的：障害のある人を受け入れているか。受け入れられる／られない理由を調査することで、受け入れられるための条件を明らかにする。

方法と対象：アンケート調査は奈良県内の絵画教室、造形教室に行った。

インタビューは障害のある人を受け入れている絵画教室に行った。

A・Bの調査結果と提案

・地域で障害のある人が通える造形教室が必要である

養護学校の教員へのアンケート、インタビューの結果からは、学外あるいは卒業後に生徒がアート活動が続けられる環境をつくることで、生徒の充実した余暇活動にもつながり、精神的にもいい影響があり、安定した就労にも結びつくのではないかと回答が多かった。定期的・不定期に障害のある人が通える造形教室は、障害のある人の居場所づくりともなるのではないだろうか。特に軽度の障害や弱視の障害のある人自身が通いたいと思ったときに、受け入れることのできる教室や公民館などでの講座を期待する声もあった。

また、各地にいくつもそのような教室があることで、障害のある人にも選択肢が生まれると考えられる。

・サポートできる人を育てること

それぞれの学校は、内容、画材（材料）、人材、発表、権利などについて課題をもっており、学ぶ機会や情報交換の機会が必要であることがわかった。また現在、残念ながら、地域で障害のある人を受け入れている絵画教室はまだ少ない。地域の絵画教室に行ける障害のある人も、特別なサポートがいないことなどの条件が課される場合がある。それゆえ、障害のある人の多くは、アート活動自体を諦めたり、1人で家で創作活動が続けることもある。障害のある人にとって、地域の人たちと交流できることは、大きな経験値となることがインタビュー調査からも明らかとなった。アートサポーターといわれるような、アート活動を行う障害のある人のサポートができる人たちを育てることが必要である。

・発表できる場があること

障害のある人にとって、自分のつくった作品を発表し、第三者からの意見をもらうことは次の作品づくりのモチベーションともなる。学校卒業後に、発表の機会の少なくなる障害のある人にとって、公募情報やイベント情報が入手しやすくなり、アート活動が続けている人たちとのサロンのような集まりがあるとよいのではないだろうか。

C 奈良県東部、南部の福祉事業所へのインタビュー調査

目的：奈良県内では奈良市や生駒市などの北部と比べると、地域の資源が身近に少ない県東部南部の施設で、どのようにアート活動が行われていて、地域にどのような資源やサポート等があればいいと考えているのかを明らかにする。

また、奈良県に限らず、中山間地域や他地方でいかにされる方法を検討する。

方法と対象：奈良県南部の五條市、吉野郡十津川村にある福祉施設と、奈良県東部の山辺郡山添村にある3つの福祉施設を訪問し、インタビュー調査を行った。

Cの調査結果と提案

・研修の必要性、情報ツールの拡充

・他施設の職員との交流の機会

都市部から距離がある福祉施設では、障害のある人が、作品展を見に行くことすら難しい現状がある。そういった地理的条件ゆえ、「ノウハウをもたない」「アート活動をどう広げていったらいいのかわからない」といった悩みも聞かれたが、それぞれの福祉施設において職員や講師の熱意によって活動が継続されていることがわかった。

一方で、地理的条件ゆえの不平等を少しでも是正するため、情報ツールの整備が求められる。

さらに、他施設の職員との交流の機会があったり、また、アート活動の盛んな事業所から職員が出向いていたりすることも、さらに施設内でのアート活動や地域との交流を広げていくうえで有効ではないだろうか。

2) 試行プログラム「オープンアトリエ」

調査の結果等を踏まえ、奈良県内の４カ所で、地域でのアトリエ活動として「オープンアトリエ」プログラムを行った。どのような条件であれば障害のある人や支援者が参加しやすいかを考えるために、対象者、プログラム、講師、会場、日程など、さまざまな異なる条件を設定し、複数のパターンの地域のアトリエ活動（オープンアトリエ）を試行的に実施した。



目的：

- ① 地域の障害のある人や子どもが参加できるアートワークショップを実施し、参加者から実施にあたってのニーズを聞き取る。
- ② どのようなプログラム、環境や条件であれば障害のある人が参加したい、参加しやすいのかを明らかにする。

内容：オープンアトリエは、以下のような4つの異なるパターンで実施した。

1、mirumiru

アート活動を希望する障害のある人からの参加を募り、専門性のあるアートスタッフが絵画の創作サポートをする。

2、わくわくポン！

障害のある人もない人も（こどもも歓迎）参加し、絵を描いたり、ものを作って遊んだり。身近な素材をつかった創作活動を行う。

3、印象のまなざし

視覚に障害のある人、ない人が参加し、創作活動を通して「まなざし」について「みえ方」「感じ方」の違いを楽しむ。

4、ふれあう大地のおすそわけ！

障害がある人もない人も、季節を感じながら一緒にすごす空間をつくる。自然素材を使って楽しむ。

成果と課題

4つのオープンアトリエを異なる条件で開催したことで、地域でのプログラムのニーズやプログラムを成り立たせるために必要な条件が明らかになった。地域で開催するプログラムでもっとも大切な要素の一つが会場であるが、①公共施設をかりる、②福祉施設の休日やあいているスペースを使用する、③カフェの一角を利用するなど、少しの工夫やアイデアで会場がみつかることも明らかとなった。今後、こうしたアイデアを福祉分野の人ともアート活動をしたい人とも共有していくことが必要であると思われる。

3) アートサポーター養成講座

オープンアトリエプログラムの実施においても必要となるのは、表現活動を支える多様な支援者の存在であると考え、あわせてアートサポーター養成講座を実施した。オープンアトリエを実地で体験し学ぶことができるプログラムのほか、多様な障害のある人の支援方法について学ぶ研修や、展覧会の企画運営について継続的に学ぶプログラム等を実施した。

目的：障害のある人、ない人、誰でも参加できる創作プログラムの実施や、展覧会づくり、レクチャーなどを通し、アートサポーターとして必要な知識や心構えを学ぶ。

内容：

- ① 展覧会において「アート作品、プロジェクトをみせる」際に重要な考え方、企画の具体的な展示方法などについて、展覧会づくりを通して学ぶ。
- ② 障害のある人（特に視覚に障害のある人、聴覚に障害のある人）の創作活動において重要な考え方などについてレクチャーをとおして学ぶ。
- ③ 創作プログラム実施において重要な考え方、具体的なプログラム、準備物、記録の取り方、注意点などについて、創作プログラムのサポートを通して学ぶ。

対象：

- ① 障害のある人のアート活動を支えていきたい人
- ② 障害のある人、ない人、誰でも参加できる創作プログラムの実施に関心がある人
福祉とアートをつなぐアートサポーターとして活躍したい人

成果と課題

2014年度はさまざまなレクチャーや体験型のワークショップなどの研修を行い、「意識をかえる」「知らない情報を知る」「先駆的事例から学ぶ」などを目的としたが、さらに具体的な支援方法について学ぶには実地で学ぶことが必要ではないかと考え、今年度はオープンアトリエにアートサポーターとして入ること、準備から振り返りまでを継続的に学べる研修を行った。この研修を通して、複数でアートサポーターとして関わることで互いに情報交換したり、ネットワークが生まれるといった成果があった。

また、展覧会について学ぶ4回の研修では多くの人が連続して参加し、展覧会を開催する意義から展示方法まで具体的に学ぶ機会となった。

多様な障害について学ぶ講座では、視覚に障害のある人、聴覚に障害のある人と美術活動という視点から、ふだん聞く事ができない多様な美術教育について学ぶ機会となり、関西に限らず遠方からも参加者が多く参加していた。

著作権などの権利保護については、今年度はとくに基礎知識を学ぶだけではなく、どのような契約書かわかりやすいのか、またどのようなチェックリストが必要かといった議論を行い、それぞれの福祉施設や支援者が応用できるようにしたことで、参加者からわかりやすかったとの声を得た。

今後の研修のあり方については、情報交換をしたり、新しい知識や考え方を得るようなものと、具体的に実地で学べるものを系統立て、年間を通じて研修の情報を提供していくことで、参加者も計画立てて、学ぶことができると考える。



3

報告

1) 調査

A 奈良県内の養護学校へのアンケート調査およびインタビュー調査

目的：養護学校ではどのような美術教育が行われているのか。学校の時間以外を生徒はどう過ごしているのか。卒業後、生徒がアート活動を続けたいといったニーズを先生たちはどう考えているのか等を明らかにする。

方法と対象：アンケート調査およびインタビュー調査。アンケートは奈良県内の養護学校 13 校に送付した。インタビューは、養護学校の進路指導や美術の教員の他、自律訓練事業福祉型専攻科等に行った。

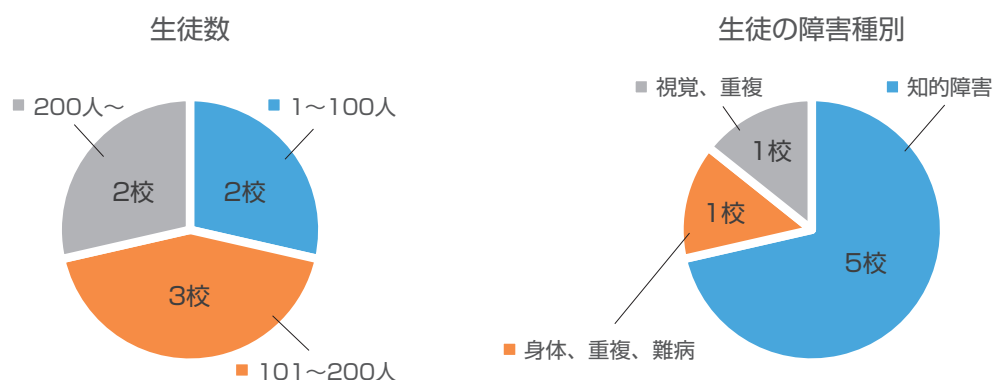
アンケート 13 校

インタビュー 6 力所（養護学校 4 校、元養護学校教員 1 名、自立訓練事業福祉型専攻科 1 校）

結果：アンケートおよびインタビュー調査で得られた回答を以下、併記した。

アンケートの回答率 53.8%（7 校回答／13 校送付）

1. アンケートに回答した 7 校の属性



2. 学校でのアート活動について

① どのくらいの頻度で？

ほとんどの学校が美術の時間を週 1 回、月 4 回行っている。

盲学校では美術の時間を週 7 回行っている。

② どのように？

課外活動としてアート活動を行っているのは、2 校のみで、他の学校では美術の授業として行われている。仕事の授業

(例えば農業)・生活の授業(お金を数える)と並んで重要な授業の位置づけとなっている学校もあれば文化祭に力をいれている学校もある。

③ 活動の内容は誰が決めているか？

養護学校では、担当する教員に、カリキュラムづくりから授業の運営まで任されており、教員によって授業の仕方が毎年異なっている。養護学校の美術教育に特化した研修などはない。

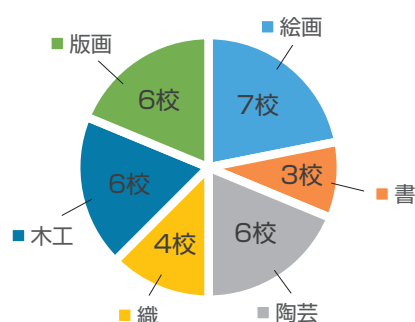
④ 発表の機会について

校内展示に加え、県内のアート展や県展等に出展している学校がほとんど。他校との交流として発表の機会をつくっている学校もあった。

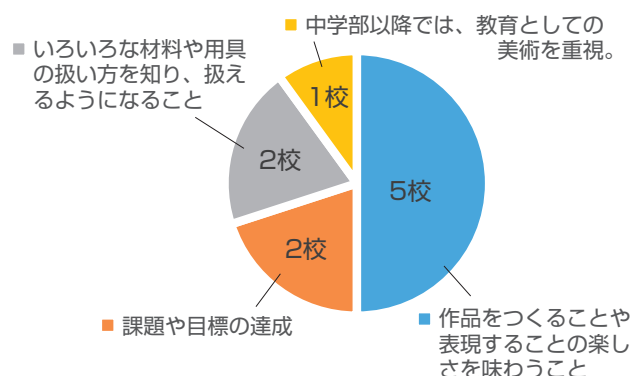
(回答者の声)

- ・ 在校生については、先生が発表も含めた年間計画を年度初めにつくっているが、卒業生には発表や公募のお知らせなどができていない。
- ・ 美術の先生が教諭なのか講師なのか非常勤なのかによって意識が違い、発表する学校も限られてきている。

どんなことを授業でしているか



授業で重視していること



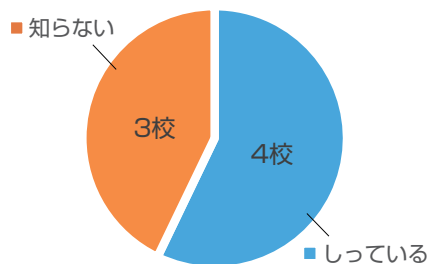
3. 現在の課題や必要としていることについて

(回答者の声)

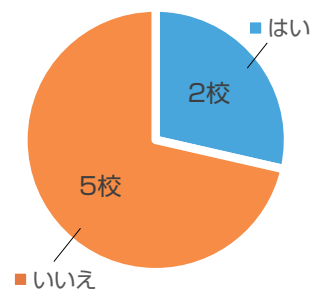
- ・ 重度の障害のある人に対して、個々の先生がオリジナルの自助具を自前で製作しており、金銭的な課題を感じている。
- ・ 視覚障害者にあった特殊な画材等を使用する場合、個人に購入させることが難しい場合がある。また、他の障害の人が使っている道具などの中には、視覚障害者にも有効なものもあると思われるので、そういった情報は知りたい。
- ・ 個別ではなく、グループ活動として、授業内容の精選と積み重ねをどのようにしていったらよいか。
- ・ 高等部の生徒にとってもアートの時間は十分に必要であることを上手に示し、他の先生方の理解を得られ、授業時間が削減されないようにもっていきける人が必要。
- ・ 発表の場(校外)において、保護者の中には個人情報を開示してほしくないと思われることや、不平等になるようなことをどう考えたらいいか。
- ・ アニメのキャラクターを描く子どもがいるが、発表したくてもこのような作品を公の場で発表していいのか、著作権問題もあるのでわからない。

4. 学校外での活動について

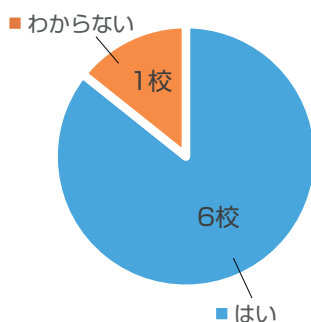
障害のある人が地域で参加できる
絵画教室を知っていますか



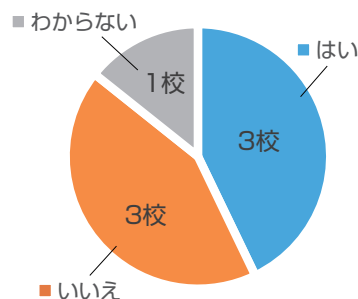
学校外でのアート活動について
生徒や保護者から相談を
受けたことがありますか



卒業後も生徒はアート活動
を続けていますか



卒業後にアート活動を
始めた生徒はいますか



(回答者の声)

- ・卒業生とのつながりは就労や職場定着支援を通して強いものの、アート活動など就労以外のことに関してはよくわからないのが現実。唯一、アート展に出展することを通して、卒業生のアート活動がわかるようになってきている。
- ・一方で卒業後、そもそも生徒との関わりが少ない学校もある（先生との個別的なつながりとなっている）。

5. アート活動を卒業後に続けるために必要なサポートは？

(回答者の声)

- ・アート活動を行える、または取り組める場所、取り組んだ作品の発表の場があればと思う。
- ・制作についてのアドバイス、支援する職員が必要。
- ・共に創作できる仲間（共感できる人の存在）が大切。
- ・制作に必要な材料、画材の負担が少ないこと。販売システムについても知りたい。
- ・仕事後に取り組むにしろ、休日に取り組むにしろ、心の余裕も必要になってくるので、メンタルな部分でのサポートも必要になってくるのではないと思われる。
- ・サポートをしてもらえるよう、親御さんの協力が得られればよい。
- ・メーリングリストなど情報とかが分かるツールがあれば教員としても、保護者などに伝えやすい。
- ・月に1回とか行く教室があって、そこで定期的に展示してもらおうとかがあればよい。
- ・画材屋さんにポスター等もあればよい。
- ・弱視の生徒の中にも、絵画教室などに通いたい人はいると思われるので、受け入れなどが進むと良い。公民館などで開催されているちょっとした講座などにも、「障害のある方も参加可」（この文言が適切かどうかは別として）などの表示がされるようになると参加しやすいかもしれない。

6. その他、考えるところ

(回答者の声)

- ・ 限らない能力を備えた生徒たちが、卒業後も創作を思い切り発揮し、発表できる場がほしい。
- ・ 余暇活動をどうしていいかわからない人もいるので、美術的な活動で生活に充実感が得られ、能力を生かせるような取り組みができればいい。
- ・ 仕事以外に息抜きできる場所。そういう場や時間をつくってあげたい。
- ・ 視覚障害の人でも、何かに参加したり、取り組みたいという意欲を持っている人はいる。ただ、受け入れ側としては、視覚障害と聞くと躊躇すると思われるし、視覚障害者側も、迷惑になるのではないかなという思いを持ってしまって参加を躊躇することが多い。最初はたんぼぼの家などのノウハウを持ったところが、参加しやすいWSなどを開いて、その後も、地域で続けたい人などに、地域の絵画教室や公民館などの講座を紹介するなどの連携をすすめるコーディネーター的な役割を担ってもらえると有り難い。その際に、地域の絵画教室等においては、視覚障害者への接し方や道具、画材などをどのようにしたらよいかを相談していける相手として、例えば、盲学校の美術教諭など講師の登録をして、つないでいくような取り組みを検討していったらいいと思う。

結果から見えてきた課題とニーズ：

- ・ 学外のアート活動、あるいは卒業後のアート活動について、先生と生徒の個別のつながりを通してしか、把握できていない現状がある。一方で、生徒の余暇活動の充実については、先生も危惧しており、仕事や生活との両立の中でのサポートや支援者のサポートの有無が課題となると感じている。
- ・ 学外、あるいは卒業後のアート活動を生徒が続けていけるために、地域で受け入れてくれて、かつ適切な支援の受けられる絵画教室などがあるとよい。
- ・ 卒業後について、先生との個別のつながりのない生徒に対しては、公募などの情報が伝わりにくい。メーリングリストなど、負担なく情報を伝えられる環境整備があるとよい。

B 奈良県内に住む人たちが通える地域の絵画教室へのアンケート調査およびインタビュー調査

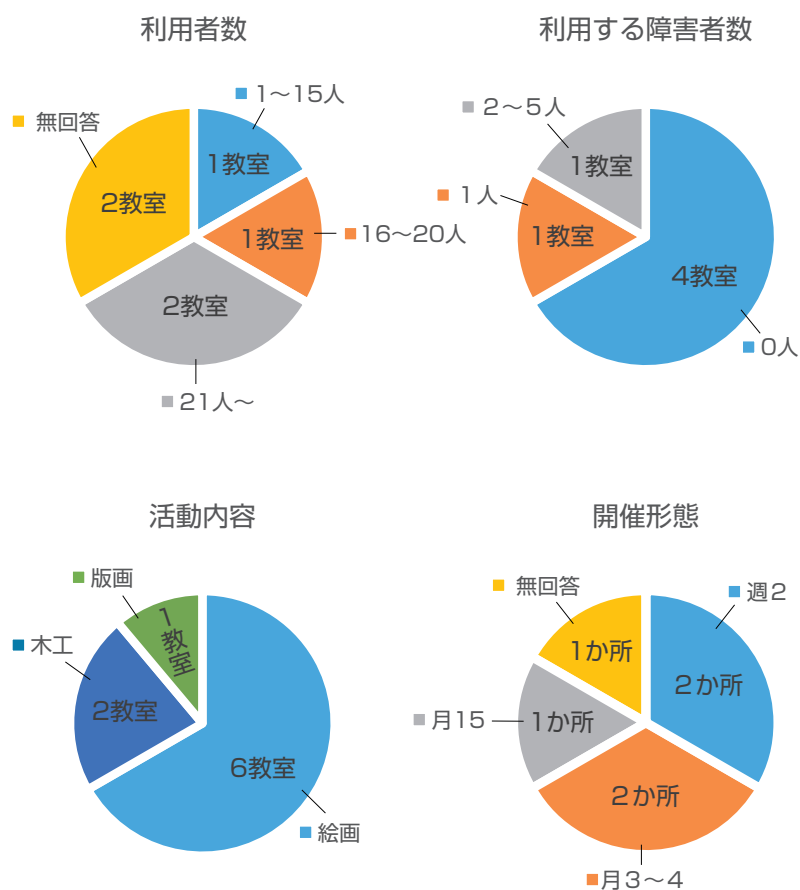
目的：障害のある人を受け入れているか。受け入れられる／られない理由を調査することで、受け入れられるための条件を明らかにする。

方法と対象：アンケートは奈良県内の絵画教室、造形教室に送付した。インタビューは障害のある人を受け入れている絵画教室に行った。

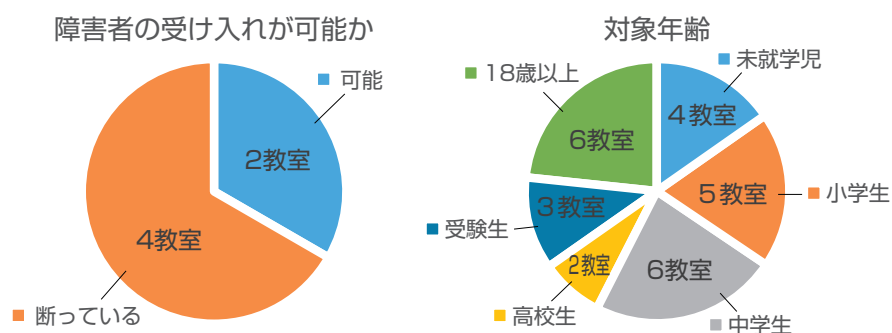
結果：アンケートおよびインタビュー調査で得られた回答を併記した。

アンケートの回答率 20%（6教室回答／30教室送付）

1、アンケートに回答した6教室の属性



2、利用について



(回答者からの声)

- ・参加費について以前は 2000 円 + 材料費 300 円 (～ 600 円ぐらい) / 月。いまは、材料費こみで 3000 円 / 月。
- ・利用のきっかけとなったのは、支援センターからの紹介や口コミ。
- ・最長 8 年通った障害のある人もいる。
- ・活動内容や発表については、障害のある人の意思を尊重し、本人に任せている。
- ・対話の中でやりたいこと、描きたいことを見つけていく。写真などは見ず、言葉でのやり取りだけ絵を描いてもらう。
- ・ある程度課題は出すが、基本的には好きなことをしてもらっている。

3、障害のある人を受け入れるにあたって、必要なサポートとは何か。

(障害のある人を受け入れていない教室からの声)

- ・入口、アトリエ、トイレのバリアフリー化、造形と障害児者に理解のあるスタッフが 3 人に 1 人程度必要。
- ・障害の特性にあった指導をするための知識や技術を持った人がいれば可能。
- ・1 人で絵画工作教室をしているので、障害の子どもを受け入れるだけのゆとりがないのが現状。
- ・今まで何人か見ていたが、すごく手がかかって大変だった。

(障害のある人を受け入れている教室からの声)

- ・障害の有無で差別して考えたことがないのでわからない。
- ・学校を卒業した後に、こういう地域の絵画教室のニーズはあると思う。養護学校の先生からは相談受けることは多い。
- ・公募展に出してもその後続いていく関係がない。一人で描いている人に対しても、この教室でならみんなが意見や感想を言い合っているの、いい関係ができていないのではないかと感じている。
- ・障害のある人だからといって、特別なことはしていない。

結果から見えてきた課題とニーズ：

- ・今回、アンケートに回答した 6 教室のうち、障害のある人を受け入れている教室は 2 教室にとどまった。受け入れられない理由としては、「1 人で教室を運営しているため目が届きにくい」「障害の特性を理解した支援者がいない」「教室がバリアフリーになっていない」などがあがった。また、過去に障害のある人を受け入れて大変な思いをした、という失敗体験から「受け入れない」という選択をした教室もあった。
- ・一方で、障害のある人を受け入れていると回答した 2 教室、また、インタビュー調査を行った 2 教室（1 教室はアンケートと重複）からは、「特別なことはしていない」「障害の有無で差別したことがないからわからない」「学校外での人間関係をつくる場としての機能がある」などの意見があった。
- ・障害のある人に対しての特別なサポートが必要であると考えのではなく、1 人ひとりの特性をみて、まず受け入れる機会をつくることから始めてはどうかと考えられる。

C 奈良県東部、南部の福祉事業所へのインタビュー調査

目的：奈良市や生駒市などの北部と比べると、地域の文化的な資源が身近に少ない東部南部の福祉施設で、どのようにアート活動が行われているのか、またそれらの福祉施設は地域にどのような資源やサポート等があればいいと考えているのかを明らかにする。

方法と対象：奈良県南部の五條市、吉野郡十津川村にある福祉施設と、奈良県東部の山辺郡山添村にある3つの福祉施設を訪問し、インタビュー調査を行った。

結果（インタビューより）：

1、施設内でのアート活動について

- ・生活介護のプログラムの1つとして行っている。
- ・週に1回、ミュージックケアのプログラムの中で、外部講師を招いて行っている。

2、作品の発表について

- ・奈良県の障害者作品展への出品は毎年行っているものの、作品展は会場が遠く、作品を持っていくのが大変である。出品した利用者が自分の作品を見に行くことも難しい。
- ・展覧会もいつかはやってみたいと思っているが、ノウハウが職員にない。
- ・施設内では、壁にかけたり、パーティションにはったりして展示し、ファイルにいれて保管している。

3、権利について

- ・一人の利用者の作品のみポストカードにしているが、二次使用する前に、家族と相談し、売れた分はその人個人の工賃に上乗せしている。生活介護の商品としてつくらせてもらっている。

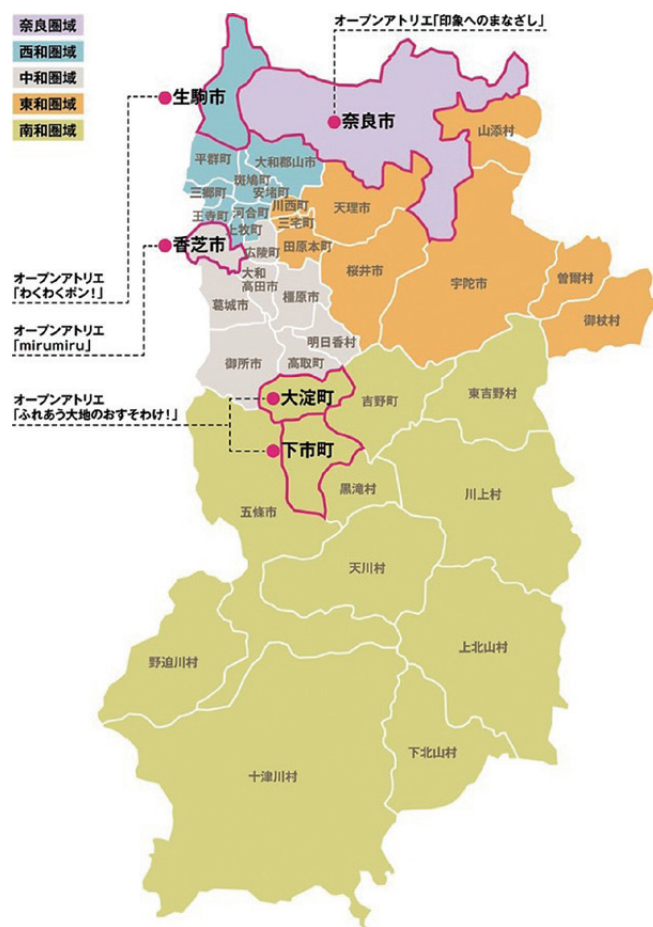
4、アート活動担当の職員の思い

- ・どこまで職員が介入したらいいのか、というのが難しい。もちろん、本人の意思というのが大前提ではあるが、画材の選び方についても最初の導入についても、ある意味誘導になってしまうことがある。
- ・情報の取り方については、職員個人に依ってしまうところがある。
- ・職員も素人なので、施設でのアート活動をどのようにしていったらよいのかというのが、なかなかわからない。商品化するノウハウや利用者さんの才能を発見した後はどうつなげていくか、というのが知りたい。

2) 試行プログラム「オープンアトリエ」

調査の結果等を踏まえ、奈良県内の4カ所で、オープンアトリエを行った。対象者、プログラム、講師、会場、日程など、さまざまな異なる条件を設定し、複数のパターンの地域のアトリエ活動（オープンアトリエ）を試行的に実施した。

プログラム タイトル	いつ	どこで	どんな人とどんな内容	ポイント
mirumiru (ミルミル)	土曜日の午後2時 から4時	香芝市の福祉セン ター	障害のある高校生以上と 絵画を中心とした創作活 動を連続4回で実施。	継続したプログラム での変化をみる。
わくわくポン!	平日の午後4時か ら5時半	生駒市のカフェ	障害のある人ない人、子 どもも歓迎。身近な素材 を使った創作活動。	1回だけの参加でも 楽しめる場。
印象のまなざし	施設がつかえる休 日など	奈良市の福祉施設	視覚に障害のある人ない 人が参加し、創作体験を 通して「見え方」「感じ方 」の違いを楽しむ。	盲学校や視覚障害の ある人の事業所と連 携。
ふれあう大地の おすそわけ	土曜日のお昼、午 後	吉野郡の畑とカフ エ	季節を楽しみながら一緒 に過ごす空間をつくる。	造形だけではないプ ログラム。



実施地域

1. mirumiru

目的

アート活動を希望する障害のある人が言葉だけでは表せないこと、感じたままの思いなど、自由に絵画で表現してみる。そのために、専門性のあるアートスタッフが絵画の創作をサポートし、たくさんの“できる！”と一緒に発見し合う。

内容

障害のある人（高校生以上）が参加し、絵画を中心とした創作活動を行うオープンアトリエ。また、支援について学びたい人はサポートをしながら一人ひとりの好きなこと、可能性をのばす造形活動の支援について学ぶ。

日時：11/21（土）、12/5（土）、12/12（土）、12/26（土）14：00～16：00

場所：香芝市総合福祉センター創作工芸室（奈良県香芝市）

講師：岡崎潤（デザイナー、造形教室主宰）

参加者：17名

アートサポーター：7名



障害のある人の造形教室 参加者募集!! オープンアトリエ「mirumiru」

言葉だけでは表せないこと、感じたままの思いなど、自由に絵画で表現してみませんか。このオープンアトリエ「mirumiru」では、アート活動を希望する障害のある人からの参加を募り、専門性のあるアートスタッフが絵画の創作をサポートします。たくさんの“できる！”と一緒に発見し合いませんか。みなさまからのご参加をお待ちしております！

■11/21(土) ■12/5(土) ■12/12(土) ■12/26(土)

14:00～16:00 ※12/12(土)は雨天決行です。雨天の場合は12/26(土)に繰り上げ開催となります。

会 場：香芝市総合福祉センター

創作工芸室(2階)

〒639-0251 奈良県香芝市遠瀬1丁目374-1

Tel.0745-79-7520(代表)

参加対象：高校生以上の障害のある人

※年齢や障害の種類は問いません。

参加定員：10人

参加費：無料

※材料や道具などは参加費が別途あります。材料費、会場費、お茶代として別途500円をいただきます。



場づくりの工夫

創作の時間だけではなく、できた作品をみながら交流する鑑賞の時間も設けた。4回連続講座の試みとして、工夫した点は以下のとおりである。

- ・4回の講座の中で、じっくり個々の理解と信頼関係を深めた。
- ・毎回打ち合わせと振り返りを行い、参加者の様子を共有し、次回以降のサポートにつなげた。
- ・記録の取り方、情報共有の仕方を検討した。
- ・最小限で多様な対応ができる画材セットを検討した。
- ・毎回創作後にお茶を飲みながら作品を発表し合う〈サロン〉の時間設けた。
- ・毎回スタッフとサポーターの役割分担を明確にした。
- ・個々に話を聞いたり、手紙を書くなど、保護者との信頼関係も大切にした。

また、スタッフとサポーターは、障害のある人とともに創作活動に主体的に関わる中で、以下のことを共通目標とした。

- ・参加者それぞれの魅力（個性・可能性）を引き出す（発見する）
- ・参加者それぞれの魅力（個性・可能性）が伸びる方法を模索する
- ・参加者それぞれの魅力（個性・可能性）が光る作品としてかたちにする（展示、プロセスの評価）
- ・アトリエ活動を支え見守るサポーターの役割を考える
- ・記録の取り方、共有の仕方について考える
- ・個別のサポートに対応できる準備物について考える
- ・豊かな創作が継続できる環境づくり（条件）について考える
- ・新しい発表と鑑賞の場としての＜サロン＞のあり方を考える

参加者の感想

- ・皆、他の人上手でそれぞれ個性があって、絵もこの人が一番うまいとかなんてないんだなと思った。スタッフの人も、色鉛筆、絵の具など渡してくれて、優しくてうれしかったし、楽しかった。また家でも描こうと思う。精神障害や自閉症の人たちのこと、サポートが良かったです。岡崎先生に、絵は楽しく、自分の好きなように描いてといくと上手くなっていくと、と言われたので、楽しく自分流を大事に描いた。
- ・家ではぜんぜん絵なんて描かないのに雰囲気よかったのか。毎回「行くー」「描くー」と意欲的に取り組んでくれた。（参加者の保護者）
- ・コミュニケーションがとれないので、スタッフとの交流がなかなかとれなくて、残念だったが、息子なりに頑張りと、有意義な時間が持てたようだ。またこのような形でやっていただきたい。スタッフの皆さんも明るくて温かい方が多かったので、楽しくできたように思う。（参加者の保護者）
- ・来る前はどうかと思っていましたが、ボランティアの方の上手なサポートと場の雰囲気があったのか、とても喜んで参加できていた。（参加者の保護者）
- ・絵を描くことが苦手だと思っていたが、迷いもなく思いっきり描けていた。そして皆さんの満足した楽しい顔を見ることができ、心に残る日となった。（参加者の保護者）
- ・はじめは4回とも来れるかなと心配していたが、本人も「ここに来たらこうするんだ」と見通しが持て、楽しく過ごすことができたので、全回とも出席できたのだと思う。いつも会う人とはまた違う出会いがあり、息子にとって良い経験になったのではないかなと思う。（参加者の保護者）
- ・音が苦手なこともあり、途中で休憩をはさみながら参加した。一度奇声を出してしまったものの、次回も参加したい！と言い、とても楽しみにしていた。（参加者の保護者）

講師を務めた岡崎潤さんの総評

①オープンアトリエの目的が達成されたかどうか

定員を大きく上回る応募から、オープンアトリエ（地域のアトリエ活動）に対するニーズと期待値の高さが確認できた。初めての画材に挑戦した人、数年ぶりに描けたという人、（作品が発展する様子を見て）ご家族がこんなに描けると思わなかったと話す人、自信がついたという人など、たくさんの”できる！”が生まれたように感じている。連続4回通しでの参加としたため、個々への理解が深まり、絆のような信頼関係も生まれた。

道具の使い方などの基本的な学び以外に一方的な指示はせず、一人ひとりを主体として活動を行った。またアートサポーターにも主体性を持って支援に取り組むことを求め、その結果、参加する全ての人が主体となり自由な表現活動ができる場ができたのではないだろうか。

また、飲食を楽しみながら、リラックスした雰囲気の中で互いに作品（製作経過）を発表し合うサロンは、とても有意義で、アトリエ活動そのものが豊かになったと思われる。

②オープンアトリエを実施してみてもの課題

- ・メインの活動室の他、落ち着ける部屋（場所）の確保
- ・毎回の画材の準備負担を軽減する方法、画材や作品の保管場所の確保
- ・毎回の記録整理と共有の負担と時間の確保

③今後の展開、展望について

今回の連続講座において、アートサポーターの協力が大きく、参加者の満足度の高さにも貢献していたように思われる。今回は、講師が具体的な活動プロセスを取り仕切っていたが、今後は各地でアートサポーターを養成し、アートサポーターだけで同様の講座や絵画教室が開催できるようにしたい。同時に講師やアートサポーターの派遣の仕組みや、画材提供サービスのニーズへの対応も考えることが必要だろうと思う。

今後、創作活動を伴わないサロンのみの開催もよいかもしれない。あるいは、絵画以外の他ジャンルのアトリエ活動との連携も広げてみたい。

同様の講座や絵画教室を継続して行っていくためには、参加者には参加料という問題が発生するかもしれない。たとえば、一般企業と連携し、障害あるなし問わず企業の従業員が、会社の福利厚生の一環として、福祉施設のアトリエ活動を利用するというのはどうだろうか。

成果と課題

定員を上回る参加者の応募から、当事者や家族からの地域のアトリエ活動への期待が大きいということがわかった。障害のある人のなかでも発達障害のある高校生、卒業し企業で就労している人、在宅または事業所に通う精神障害のある人からのニーズが特に高かったことがうかがえる。また、特に本人が未成年の場合や精神障害のために不安定な日常生活を送っている場合（施設や企業を休みがち等）は、家族からの期待も大きく、信頼関係を築くことも必要であると思われた。

2. わくわくポン！

目的

身近な素材を使い、一度だけ、短時間でも楽しんでつくりことができるプログラムを実施し、誰もがアートを楽しむきっかけづくりとする。

内容

障害のある人もない人（こどもも歓迎）も参加し、身近な素材をつかった創作活動を行う。パラシュートやボンボン人形づくり、リリアン編みなどのプログラムを通してみんなで楽しむ創作活動について学ぶ。

場所：喫茶ゆうほ～（奈良県生駒市）

講師：竹田悠佳（たんぼぼの家アートスクール Pocket 運営）

協力：社会福祉法人いこま福祉会



2-1、パラシュートをつくって飛ばそう！

内容：講師の竹田さんからの挨拶のあと、各々が名札をつくって、自己紹介をして、今回つくるパラシュートの説明や実物を参加者に見せる。パラシュートに好きな絵が描けたら、ボールを好きなだけつないでいく。糸で、パラシュート、ボール、名前を書いた折り紙をつないで、最後に、マスキングテープで糸をまとめたら完成。できた人から、実際に自分のつくったパラシュートをとばしてもらった。

日時：11/24（火）16：00～17：30

参加者：9名（障害のある人3名、子ども3名、おとな1名、引率の支援者2名）

アートサポーター：1名 スタッフ：2名

2-2、ボンボン人形をつくろう！

内容：自己紹介が終わったあと、講師の竹田さんより今回使う毛糸やフェルトに関する説明、また、実際につくるボンボン人形を参加者に見せる。ボンボンをつくる機械に毛糸をセットして、ひたすらくるくると巻いていく。毛糸が全部巻けたら、はさみで真ん中を切ってボンボンの形にする。同じ要領で2～3個のボンボンをつくり、それらをバンドではりあわせてその上に、フェルトでつくった目・鼻・口・手足などのパーツもくっつけて完成。自分から、楽しそうに作品の説明をしてくれる参加者もいた。

日時：12/9（水）16：00～17：30

参加者：7名（障害のある人3名、子ども3名、おとな1名、引率の支援者2名）

アートサポーター：1名 スタッフ：3名

2-3、ペットボトルをつくろう！リリアンあみ

内容：今回は、参加者がすでにほとんどが知っている人同士ということもあって、自己紹介なしに、スタート。テーブルの上には、今回リリアン編みでつくる蝶ネクタイを置いて、参加者がいつでも見られるようにしておく。まずは、ペットボトルにつけた印にあわせて、割り箸をテープでとめて、リリアン編み機を作成する。1周目は割り箸に表裏とじぐざぐに毛糸を通して行って、2周目からは下糸を上糸にひっかけて、その後はそれを繰り返す。20cmほど編めたら、上糸を結んでいき、下糸をひっぱって、筒状の形で完成。真ん中を別の糸で何重か巻いてしばって、蝶ネクタイの形にして完成。完成した蝶ネクタイとポーズを決めて、写真を撮る参加者もいた。

日時：12/24（木）16：00～17：30

参加者：8名（障害のある人）

アートサポーター：1名 スタッフ：3名

場づくりの工夫

全3回を通して、参加者の人数にもよるが、机を囲むようにみんなの顔が見える位置に座り、終始、わきあいあいとした雰囲気だった。2-1、2-2に参加した、児童デイサービス事業所の利用者は引率した職員が横につき、やや他の参加者との交流が少なくなってしまう場面は見受けられたが、講師の竹田さんやアートサポーターの絶妙な声かけなどで作品完成時にはお互いが話し出すようになっていた。

また、2-3ではオープンアトリエの会場になっている喫茶店で働く利用者が参加者となったこともあり、創作活動スタート時からコミュニケーションが活発に行われていた。

参加者の感想

・手先を使う作業が多くあり、参加者にとって良い練習になったと思う。（引率した支援者）

- ・ あたたかい雰囲気の中で個々に合わせての支援（指導）をしていただきありがとうございます。ボンボン人形が少し難しかった子どもも独自の展開をほめてもらったりして、みんなが満足した顔で作品を大事そうに持って帰りました。（引率した支援者）
- ・ 普段なかなか出来ない同世代のお子さんと交流できる機会をいただけて良かった。（引率した支援者）
- ・ 楽しみながらも手先を使う作業があるプログラムを期待している。みんなが合同で何かを作るものなどでもいいかと思う。（引率した支援者）

講師を務めた竹田悠佳さんの総評

①オープンアトリエの目的が達成されたかどうか

参加対象は、障害のある人ない人、と障害の有無で限定しなかったこともあり、当日を迎えるまで、「どんな人が来てくれるかな」、「みんな楽しんでできるかな」というわくわくした気持ちと、少々不安な気持ちがあった。全回を通して、内容に興味を持ってもらえるような導入をし、作業行程を分かりやすくしてやりやすく、なおかつ、一つひとつの工程に楽しさを感じられるような工夫の準備を行った。そのおかげか、当日は、参加者の子どもや、大人も、どんどん作業の手が進んでいったのが見て取れた。もくもくとひとりで集中する人や、周りとは話しながら進めていく人。少し苦戦する場面があった時も、アートサポーターの前向きな声かけやサポートのおかげで、万が一のハプニングもなく、つくることができた。参加者の方が「楽しかった」「見て見て！」「帰ったらお父さんとお母さんに見せるわ～！」などと笑顔で言っておられたので、講師を務めた私もほっと胸をなで下ろすことができた。

②オープンアトリエを実施してみた課題

今回は、ワークショップ形式で行ったので、各回、その内容をつくり終えるようなかたちをとった。1 回のみの参加の人も多く、どれくらい時間がかかるのか予測しづらかった。ただ、回を重ねるごとに、私の中で、最後までつくり終えることができなくても、そのつくる過程やコミュニケーションを大事にしたいと思うようになった。

また、1 回きりのワークショップ形式では、参加人数も、じっくり向き合うには 10 人が限度だと感じる。アートサポーターについては、たんぼぼの家アートセンター HANA のスタッフに手伝ってもらったので、声かけやサポートの仕方も慣れており、なんの心配もなくお任せすることができた。アートサポーターの育成や慣れたアートサポーターとの事前の打ち合わせも、進行に関わるため、大切なことだと感じる。

③今後の展開、展望について

第 3 回目『ペットボトルでつくろうリリアン編み』の参加者との関わり方がよかったのではないかと考えた。参加者のほとんどは、アトリエ会場の「喫茶ゆうほ～」で働く障害のある人で、第 1 回 2 回の時から、のぞきに來ていたり、オープンアトリエの存在に興味がある様子が見られていた。創作活動をスタートする時間も終了する時間も、参加者各々がバラバラだったが、最後には、みんなが見せ合いにきて、集まったりすることもあった。そのような緩やかな進行の仕方もいいなと感じた。

成果と課題

オープンアトリエわくわくポン！では、その日つくる作品についての説明と見本が事前に示されて、参加者には見通しがききやすいよう配慮されていた。加えて、創作過程についても、単純化・繰り返しが多く、おしゃべりするなどの余裕が生まれていたようにも思われる。聞き取れた参加者からの感想では、「楽しかった」というものが多かった。

3. 印象のまなざし

目的

特に視覚に障害のある人の創作体験の機会をつくる。創作体験を通して、「まなざし」というキーワードから人それぞれの「みえ方」「感じ方」の違いを楽しむ。参加対象者は、みえない人・みえにくい人5名、みえる人5名とした。ここでの「まなざし」とは、実際に見えているものではなく、頭の中のイメージをさしている。

内容

視覚に障害のある人、ない人が参加し、創作体験を通して「まなざし」(＝あたまの中のイメージ)を楽しむオープンアトリエ。一緒に創作活動に取り組むなかから、視覚に障害のある人への創作活動の支援を学ぶ。

協力：社会福祉法人わたぼうしの会

みえない人・みえる人の創作体験 参加者募集!!
オープンアトリエ「印象のまなざし」

オープンアトリエ「印象のまなざし」では創作体験を通して「まなざし」について「みえ方」「感じ方」の違いを楽しみます。ここでいう「まなざし」は、実際にみえているものではなく頭の中のイメージのことです。人間にとってモノの印象はさまざまです。このプログラムは参加者の頭の中に広がるまなざしを色やカタチ、言葉でつくってみたい。制作や発表が苦手な人、したことのない人も大歓迎です。とにかく楽しく参加できるプログラムを用意しています。みなさまのご参加をお待ちしております。

参加対象・定員
 ・みえない人・みえにくい人：5名
 ・みえる人：5名

参加費：無料 車中や公共交通機関が利用できます。印刷費、お茶・お菓子代として前金500円をいただきます。

創作体験の内容

①「記憶をつくる」
 記憶をたよりに立体的な作品をつくります。
 日時：2015.12/23(水・祝) 14:00～16:00
 会場：たんぽぽの家 アートセンター HANA
 参加費：100円(2015年12/23日) 500円(2016年1/6日)
 お申し込み締切：2015.12/16(水)

②「夢を描く」
 夢をもとに立体的な作品をつくります。
 日時：2016.1/23(土) 14:00～16:00
 会場：たんぽぽの家 アートセンター HANA
 参加費：100円(2016年1/23日) 500円(2016年2/2日)
 お申し込み締切：2016.1/16(土)

③「空間を奏でる」
 立体的なオーガニズムをつくります。
 日時：2016.2/16(火) 14:00～16:00
 参加費：100円(2016年2/16日) 500円(2016年2/22日)
 お申し込み締切：2016.2/9(土)

※すべての体験には事前研修が必須です。
 ※このワークショップで作られた作品の一部は、2016年2月16日(火)～21日(日)にアートスペース上三島にて展示します。

④(2/16) 会場 (展示会場)
 アートスペース上三島
 〒650-0229 堺市東区上三島4
 Tel.0742-23-0114

⑤(2/16) 会場 (展示会場)
 アートスペース上三島
 〒650-0229 堺市東区上三島4
 Tel.0742-23-0114

展覧会
 アートスペース上三島 展覧会



3-1、記憶をつくる

内容：記憶をたよりに各々の宝物に対するイメージから具体的な立体的な作品をつくった。参加者の自己紹介が終わったところで、創作活動スタート。目の前のあぶらねんどを各々、こねだす。あらかじめ、参加者の皆さんには、今日の創作活動の内容を伝えて、宝物についてのイメージを考えてきてもらっていたので、すぐに形をつくることができる。形ができたなら、そこに、花、枝、布、綿、ひも、ボタン、目玉、まつげ・・・などの様々なパーツを思い思いの場所につけたり、串で刺して模様をつけたりして完成。

日時：12/23(水・祝) 14:00～16:00

場所：たんぽぽの家アートセンター HANA (奈良県奈良市)

講師：吉永朋希(たんぽぽの家アートセンター HANA アートディレクター)、渡邊弥生(たんぽぽの家アートセンター HANA コミュニケーションスタッフ)

参加者：10名(みえない人・みえにくい人3名、みえる人7名)

アートサポーター：2名 スタッフ：2名

3-2、音を描く

内容：会場に流れる「演奏曲」を聴き、そこからのイメージで絵画作品を描く。曲は、たんぼぼの家で月2回行われているワークショップ「カフェラン」の「Romantic Sakuma Quartette 002」。クレヨンのクラッチ画で流れる音楽を描いてもらった。参加者の自己紹介、今回の作品創りについての説明が終わったところで、創作活動スタート。まずは、音楽を聴きながら、イメージを頭の中で形作り、あらかじめ選んだ自分の好きなイラストボードに、色を自由に塗っていく。その上を、黒のクレヨンで塗りつぶしたところで、シャッフルタイム。他の人のボードと交換をする。その後、割り箸を使って、音楽を聴きながらイメージをつくってボードの黒面をクラッチ。作品が完成。

日時：1/23（土）14：00～16：00

場所：たんぼぼの家アートセンター HANA

講師：吉永朋希（たんぼぼの家アートセンター HANA アートディレクター）、渡邊弥生（たんぼぼの家アートセンター HANA コミュニケーションスタッフ）

参加者：15 名（みえない人・みえにくい人 5 名、みえる人 10 名）

アートサポーター：6 名 スタッフ：3 名

3-3、空間を奏でる

内容：「ひらいたら ひらいてみよう」オープンアトリエ報告展(2/16～2/21 アートスペース上三条にて開催)のテーマソングをつくった。①展覧会会場でペアになって作品鑑賞、②お気に入りの作品から湧いてきた言葉を聞き合いつて、③楽器を使ってメロディをつける、というステップをふみ、2 曲が完成。

日時：2/16（火）14：00～16：00

場所：アートスペース上三条（奈良県奈良市）

講師：吉永朋希（たんぼぼの家アートセンター HANA アートディレクター）、渡邊弥生（たんぼぼの家アートセンター HANA コミュニケーションスタッフ）

特別講師：大坪・菊竹・毛利・早津

参加者：20 名（みえない人・みえにくい人 3 名、みえる人 7 名）

アートサポーター：1 名 スタッフ：5 名

場づくりの工夫

「記憶をつくる」ではコの字型に、「音を描く」では、口の字型に席を配置。みえない人、みえにくい人の席はあらかじめ講師の側で決めており、1 人ずつにアートサポーターが横についてサポートできるようにした。そのほかの参加者については、好きな席に座ってもらった。

参加者の感想

- ・ いままでこのような創作活動自体をやったことがなかったので、楽しかった。
- ・ ものをつくることは好きだけれど、する機会がなかったので、今後続けていくきっかけに今日の活動がなったらしいと思う。
- ・ 何をつくりたい、というのではないけれど、またやってみたい。
- ・ 枠組みもなく自由で日ごろ多くのことにしばられている自分を解放するヒントになった。
- ・ オープンアトリエ展示を観せていただき、一人ひとり個性的な表現に心が癒された。3 回目の音楽作りで参加して、皆さんと一緒に楽しめて心身ともに癒しの一日となり、心から感謝。スタッフの皆さんも素晴らしかった。すごく楽しかった。
- ・ 創意工夫に満ちた展覧会、ワークショップで楽しんだ。オープンアトリエの作品の飾り方も個性的で手作り感があり良かった。
- ・ 皆で 1 つのものを作る体験が面白かった。
- ・ 3 回目の音楽づくりでは、「こんな作り方があるのか〜」とすごい発見があった。印象をコトバにして、音にする……それを共同作業で行う楽しさを味わえた。音楽作りだけでも、連続講座にしても深まって面白いのではないだろうか。なごやかで楽しかった。

講師を務めた吉永朋希さんの総評

①オープンアトリエの目的が達成されたかどうか

本企画の目的は別方向の2つの目的があった。一つめは、眼差しを視覚以外の側面で考え見ることの奥深さを楽しむこと。二つめは、視覚に障害のある人に表現する喜びを知ってもらうこと。前者の目的は達することはできたと思うが、後者は少し苦戦しているというような印象がある。

②オープンアトリエを実施してみてもの課題

そもそも今回の広報で、視覚に障害のある人の参加者集めに苦戦したことが、大きな課題だった。施設や福祉関係の団体には全て広報したものの、結局そこからは反応がなく、知り合いを伝った口コミで参加者が集まった。視覚に障害のある人がアートを行なう土壌ができていないことが、その要因になっているのだと思われた。

③今後の展開、展望について

視覚に障害のある人の、アートの土壌を作るために定期的にオープンアトリエを開いていきたい。もの作りを楽しみ、発表することで自己表現の楽しさを知る、そして感性が解放される。そんなサイクルを作っていきたい。

成果と課題

2-1、2-2 ではいずれも、参加者同士おしゃべりをしながらわいわいと創る、というよりは、時折周囲の様子を伺いながら、時間に間に合わせる形でくもくと作業をされている人も多かった。初対面の参加者が多かったということもある。一

方で、みえない人・みえにくい人とペアのアートサポーターもお互いに初対面ではあるが、イメージを言語化して伝えるという作業が加わり、こちらは笑い声もよく聞かれた。全体としては、2回とも、会場内はワクワク楽しい場となっていた。また、鑑賞の時間や作品についての思いを述べる時間を設定していたことで、それまで話していなかった参加者同士のコミュニケーションもあちらこちらで生まれていた。

2-3でも、参加者の満足度・充実感が高い様子がみてとれた。例えば「笑いが起こる」「拍手がある」「声が飛び交う」等、終始活気がある会場となっていた。

視覚に障害のある人のほか、視覚障害のある人の支援センターではたらく人や学生、研究者などの視覚に障害のある人の創作活動の支援に関心のある人が集まり、関心の高さがうかがえた。

4-2、綿でかわいいオブジェをつくろう！

内容：わーくさぼーと Pono を会場に、講師の鈴木温さん・広瀬志麻さんが「大地のおすそわけ」というキーワードを手がかりに用意した素材、今回の企画に協力してくれた吉野学園が三年前から取り組まれている綿花プロジェクトで収穫された綿、それらが机に広げられて準備完了。「さまざまな素材（羊毛、化繊、吉野産の綿、木のつる等）を一つの形にする」という点が、講師が大切にしたいポイント。色もさまざま豊富に用意されたことで、参加者が会場に到着し時点で、「さわってみたい、作ってみたい」というワクワクとした期待感が会場内にあふれていた。

まずは講師からプログラムの流れ、内容を説明。その後、綿花プロジェクトを実践している吉野学園の水口正憲さんより、施設入所者の皆さんが関わっておられる種植え、栽培、収穫、糸紡ぎなどの話を、実演とともに紹介した。実演され、空気を含んだふわふわの綿を参加者のみなさんが順番にさわったところで、創作時間の開始。

講師2人が、各テーブル重ならないように、順々に様子をみながらサポートをする。わかりやすい説明と手順が用意されたこと、綿の物語を聞いたこと、素材の優しさや楽しさがあふれていたこと等から、創作時間中は、声をかけあったり、微笑みがもれたり、終始穏やかな雰囲気が持続していた。

最後に、仕上がった作品の記念撮影をし、そして交流のお茶タイムへと進行し、会が終了。

日時：3/12（土）13：00～15：00

場所：わーくさぼーと Pono（奈良県吉野郡大淀町）

講師：鈴木温、広瀬志麻（たんぼぼの家アートセンター HANA スタッフ）

参加者：9名

スタッフ：6名

場づくりの工夫

4-1 のメイン会場は畑のなかのビニールハウス。すでにその場にあるものを活用することを大切にし、採取コンテナを裏返したものに細長い板を置いてつくられた大きな机や椅子をみんなで囲んだ。また、冬のビニールハウスの中は26度になり、ぽかぽかとあたたかな空間となった。

4-2 が行われたわーくさぼーと Pono の一室は、光がふんだんに入り窓からは吉野の山々が見える、とても気持ちのよい空間。講師がめぐりやすいように口の字型に配置された机の上には、様々な毛糸や木のつるなどが置かれ、参加者の興味をひきつけた。

参加者の感想

- ・ 息子の新たな様子をみることができた。佐久間先生に癒され息子もゆったり過ごす時間がもてた。（参加者の保護者）
- ・ 野外でお鍋とは初体験で、すごく美味しくてたくさんいただいた。息子も楽しそうで、いい思い出になった。（参加者の保護者）

- ・とても楽しかった。音楽のすごい力に感動した。(参加者の保護者)
- ・学校ではできないことや、親子でできることのプログラムが沢山あればと期待したい。(参加者の保護者)
- ・どうしても「キレイな作品を作ろう」と気合を入れてしまい、子供の自由な作品を見るたび反省しました。あまり手先が器用ではないのですがすごく楽しんで取り組んでいる姿を見てうれしかったです。自宅の近くにはたくさん木の葉があるので、また作りたいと思います。ありがとうございました。(参加者の保護者)
- ・なかなか体験できない事を短い時間でできて、すごく楽しかったです。久々に母も集中できました。(参加者の保護者)
- ・身近な素材で楽しい作品を作ることができて、大変楽しかったです。
- ・どんぐりすき。ありがとう。

講師を務めた佐久間新さんの総評

①オープンアトリエの目的が達成されたかどうか

ロケーションが大変よく、地元の野菜をはじめとする食材が大変おいしかった。調理にも、豆乳鍋、トマト鍋など工夫がありよかった。その中でも、暖かく、換気がすぐできるという利点があったので、ビニールハウスが大変よかった。土間で野外料理やダンスをするにも大胆にできた。カフェの裏に、柿畑の岡が広がっており、とても気持ちよかった。日常の食材、調理や食べるといった普段の行為を改めて味わい直すことが、ダンスにもケアにも大切なので、そのことを味わえたと思う。地元に住む担当のスタッフでさえ、日々の生活やケアに追われ、余裕を持って生活を味わったり、子どもに接することができていなかったという感想を話していたのが印象に残っている。

②オープンアトリエを実施してみたの課題

このような取り組みは継続的に行うことが大切だと思う。

③今後の展開、展望について

当日、特に親しくなれた障害のある参加者がいた。家族を含め、これからもつながりを持ちたい。現地でも、年に数回、集まりを持てばうれしいと思う。

講師を務めた鈴木温さんの総評

①オープンアトリエの目的が達成されたかどうか

綿の魅力を伝えるのにワークショップはとても有効だと感じた。また、想像していたよりゆったりとした時間のなかでオブジェを作ることができたことで、綿の魅力にたっぷりと触れることができた。素材をふんだんに眺められる空間と、多くのサポーターさんに恵まれたこともよかった。吉野という地域とマンパワーにあっばれだと思いました。

円織りという方法は、貼り付けることができたり、重い素材を扱わなかったり、本当に身軽にできる綿にぴったりのワークショップになったのがよかった。

②オープンアトリエを実施してみたの課題

中身はとても充実しているので、広報次第で広がるのではと感じた。

③今後の展開、展望について

今回は円織りのオブジェだったが、お客さんが綿で作りたいものをいろんなタイプのものから選択できるなど、もっと綿の展開にレパートリーができればよいのではと思う。また、綿の収穫から参加者もともにすることができれば、さらに体験が深まりそうだ。

切羽詰まることが多い現代の人にとって、綿に触れるという行為は、一休みする時間として素敵だと身をもって感じた。綿の魅力は植物であること、眺めるだけではなく手で触れることができるということ。映像などに残すことにもとても合うプログラムだったと思う。

成果と課題

新しいものを付け足すのではなく、もともとある場や素材をうまくプログラムに組み込むことができた。地域の人にとっては、あたりまえに感じていた風景や場だったようだが、はじめての人が来て気持ち良くすごされる様子に、地域の魅力をあらためて発見されている様子が印象的だった。

また作品づくりだけではなく、体を動かすことや料理すること、場を感じることなど、最後に形が残るわけではないことも表現活動だということが伝えられるプログラムだった。日常の中にも、すべての人には輝く瞬間があることを共有できた。

奈良の中心地から遠いため、プログラムが一回きりになってしまいがちなところを継続するにはどうしたらいいかということや、その魅力的な地域資源をどうやって外部へ発信していくことができるか、などが課題として挙げられた。

5. オープンアトリエ報告展「ひらいたらひらいてみよう」

目的

地域における創作活動の場をどのようにつくるかを考えるために、オープンアトリエプログラムを実施したが、そのなかでわかったのが、つくる場とともに、作品をみせたり、共有する場の重要性だった。そこで、オープンアトリエで生まれた作品を展示発表する機会として報告展を企画した。また、それぞれ4つのオープンアトリエをどのようなプロセスで実施したか、実施するなかでどのようなことが発見できたかも共有できるようにした。

内容

障害のある人も無い人も参加した以上4つのオープンアトリエの活動のプロセスとうまれてきた作品を紹介した。

日時：2/16（火）～2/21（日）10：00～18：00

会場：アートスペース上三条（奈良県奈良市）

[illegible]

成果と課題

それぞれの作品をきちんと展示したことで、制作した人やその家族、またサポーターとして関わった人たちが、とても喜んでみてくれた。また、額装された絵をみて、額をつけるとこのようにイメージがかわるのかと驚いたり、今後自分でも額にいらて飾ってみたいといった声なども聞かれた。4つのオープンアトリエをどのように企画運営したか、アートサポーターがどのように関わったかもわかるように展示したことで、今後、地域でアトリエを開いてみたい人にとってヒントとなるように展示できた。また、会場にはオープンアトリエの参加者やアートサポーターが来場し、情報交換を行うなど、サロンとしての役割も果たした。

3) アートサポーター養成講座

障害のある人、ない人、誰でも参加できる創作プログラムの実施や、展覧会づくり、レクチャーなどを通し、アートサポーターとして必要な知識や心構えを学ぶプログラムを開催した。

2015年11月～2016年2月

福祉とアートをつなぐ アートサポーター養成講座



あなたもアート活動の担い手になってみませんか

いま全国各地で障害のある人の豊かな表現に出会う機会が増えています。展覧会やアートプロジェクトも多く開催されるようになり、そうしたアート活動を支え、担う人の力が求められています。福祉とアートをつなぐアートサポーター養成講座では、障害のある人、ない人、誰でも参加できる創作プログラムの実施や、展覧会づくり、レクチャーなどを通し、アートサポーターとして必要な知識や心構えを学びます。誰か参加はもともと、関心のある講座だけを選択することも可能です。誰もが自由に希望できる社会をめざし、豊かな疑問や不安に寄り添い、いっしょに答えをみつけていく活動の場に、一歩を踏み出してみませんか。ご参加お待ちしております。

こんなことを学びます

- ・展覧会づくりを通して…
展覧会において「アート作品、プロジェクトをみせる」際に重要な考え方、企画の具体的な提示方法など
- ・レクチャーを通して…
障害のある人（特に視覚に障害のある人、聴覚に障害のある人）の創作活動において重要な考え方など
- ・障害のある人、ない人、誰でも参加できる創作プログラムのサポートを通して…
創作プログラム実施において重要な考え方、具体的なプログラム、準備物、記録の取り方、注意点など

対 象 障害のある人のアート活動を支援していきたい人
障害のある人、ない人、誰でも参加できる創作プログラムの実施に関心がある人
福祉とアートをつなぐアートサポーターとして活躍したい人
＊アート、福祉の現場で働く人も、そうでない人も、ぜひお気軽にご参加ください。

主催：一般財団法人たんぽぽの家 平成27年度厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」

1. 展覧会の企画・実施

展覧会において「作品」「活動」「プロジェクト」をみせる際に大切な考え方、発想、そして具体的な企画や展示方法などについてレクチャーと体験を通して学ぶ、下記4つの講座「展覧会をつくる」を行った。

プログラム名	開催日時・場所	講師	内容
アートって？-どうつくる、どうつたえる	1/23(土) 10:00～12:00 奈良県立大学 (奈良県奈良市)	西尾美也 (美術家、奈良県立大学教員)	アートを伝えるとは？その方法は多様。美術家で自身も作品の発表やアートプロジェクトを各地で行ってきた西尾さんとともにアートの発信の仕方について考える。奈良県立大学の学生の企画による展覧会も鑑賞。
鑑賞って？-どうみる、どうみせる	1/30(土) 10:00～12:00 奈良県文化会館 (奈良県奈良市)	宮下忠也 (アートディレクター)	作品が多様であるように、作品をみる見方も、多様にある。また見せ方によって、作品の魅力がかわることもある。キュレーターである宮下さんとともに、鑑賞について、また見せ方について理解をふかめる。
展覧会って？-どう企画する、どう発信する	2/7(土) 13:30～15:00 奈良県文化会館 (奈良県奈良市)	鯨坂兼充 (有限会社スカイ代表)	大阪・中崎町にあるカフェギャラリーiTohen。現代アートやさまざまな企画を行ったり、本の出版を行ってきたオーナーの鯨坂さんとともに、展覧会の意義と企画や発信について学ぶ。
展示を体験する	2/15(土) 10:00～18:00 アートスペース上三条 (奈良県奈良市)	岡部太郎、吉永朋希 (たんぽぽの家スタッフ)	4つのオープンアトリエで制作された作品や、活動の軌跡を展覧会として発信する。その搬入、展示作業を体験しながら、魅力的な作品の見せ方、活動の伝え方を学ぶ。

ふりかえり

「アートって？ーどうつくる、どうつたえる」

奈良県立大学の地域創造学部、都市文化commons 2年生 38名の学生たちが障害のある人のアートに出会いそれぞれが考え、その成果を紹介する展覧会「わたしのアトリエ」を見学しながら、参加者それぞれ立場で、アートを感じてもらった。日常の実践のなかでの表現を大切にすることで、なにか日常の役割を変える事、なにかを投入することで変化が起こる、それを表現につなげていくことにみな気づいたように見受けられた。



「鑑賞って？ーどうみる、どうみせる」

宮下さんがこれまで企画した現代美術の展覧会で、障害のある人ない人も共に同じ会場で展示してあることを紹介。障害のある人が描く絵や作品は、そもそも見せようとしていない、見せることを意識されていない中でうまれてくる、1年、2年と傍らで営みをみている人だからこそ気づくことがありそこには、信頼関係がある、ということが、参加者にも意識されたようである。



「展覧会って？ーどう企画する、どう発信する」

現代アートやさまざまな企画を行ったり、本の出版を行ってきたカフェギャラリー iTohen オーナーの鯨坂さんとともに、展覧会の意義と企画や発信について学んだ。



「展示を体験する」

4つのオープンアトリエで制作された作品や、活動の軌跡を展覧会として発信。その搬入、展示作業を体験しながら、魅力的な作品の見せ方や活動の伝え方について学んだ。



参加者の感想

- ・人とアート、福祉をつなぐ活動をしたい、自分で作品を作り表現をしたいと思っている。具体的な活動はできていないが、始めるときに今日話を活かしたいと思う。また何事も相手の立場に立つことも大切だと改めて思った。
- ・話もとても面白く、自分の中にずっと入ってきた。障害のある方が豊かに作品を展覧するにあたって、サポートをする側として、展覧会のコンセプトを決めるのはとても難しい部分だと思う。今回の話が参考になりそうだと感じている。
- ・企画する側として考え方など、とてもわかりやすく説明してもらったので、参考になった。
- ・障害のある子のアート活動支援に対して、参考になる視点があって有意義であった。自分の作品制作にも活かしたい。
- ・将来的にグループ展が企画できれば、と考えていて、心当たりのあるギャラリーを当たっているところだったので、とても参考になった。

2. レクチャー

「多様な障害のある人の創作活動を学ぶ——盲学校、ろう学校での創作活動から」では、盲学校、ろう学校での創作活動や鑑賞の活動の話を通して、視覚に障害のある人、聴覚に障害のある人とがアートを楽しむ方法について考える、下記2つのレクチャーを行った。

プログラム名	開催日時・場所	講師	内容
盲学校での創作活動	1/23(土) 17:00~18:30 たんぽぽの家アートセンターHANA (奈良県奈良市)	正井隆晶 (奈良県立盲学校美術教諭)	みえない人、みえにくい人の創作活動にはどのような配慮やサポートが必要なのか。長年にわたって盲学校で美術を教えてきた正井先生と視覚に障害のある人の創作支援を考える。
ろう学校での創作活動	2/20(土) 10:30~12:00 アトスペース上三条 (奈良県奈良市)	浅田香苗 (大阪府立生野聴覚支援学校教諭、美術科)	聴覚に障害のある人にとって表現活動はどういう意味があるのだろうか。また鑑賞活動は？ ろう学校で行われている美術の実践から、表現と鑑賞、芸術を楽しむという視点について考える。

レポート：「盲学校での創作活動」

長年にわたり盲学校で全盲の人、弱視の人など視覚に障害のある人の美術教育に携わってきた経験から、レクチャーを行った。正井先生が特に力をいれて取り組んできたのが、美術に対するイメージを障害のある人がもちやすくなる工夫である。とりわけ視覚に障害のある人にとって、抽象的なイメージをかたちにするのは難しいが、先輩がつくった作品などをみせたり、さわってもらうことで、イメージする手助けとなることを行っていた。また、弱視の人にとって見やすい定規など、特別な道具によるサポート方法もあれば、シールをつかってガイドをつくるなど市販されている文房具を工夫することで補助具になることを実際の道具を見せながら説明があった。視覚に障害のある当事者、視覚に障害のある人のアートサポートに関心のある人、研究者、大学生など、約20人が参加し、関心の高さが伺えた。

「盲学校での創作活動」参加者の感想

- ・ 色々な小さな工夫の積み重ねがすばらしいと思った。
- ・ 「見る」「感じる」「創作する」が新鮮で、新たな発見をしたような感じになった。
- ・ 盲学校で自分自身、美術をやっていたが、デザインや色についての授業がなかったので、進歩しているのだなと思った。このような進歩した新しい情報をもっと聞ける場があったらよかった。
- ・ 工夫できることが沢山あると知れた。見えない状態という事を考えてみる機会になった。知らない事を知る機会となり、大変良かった。



- ・盲学校については知らない事ばかりだったので、大変面白かった。
- ・「色」も含めた美術の世界を生徒さんたちに教え、伝える工夫をしていることに感銘を受けた。豊かなアイデアというのが、大変参考になった。
- ・弱視・全盲というだけでなく、本人が何歳のときに失明し、色や言葉、ものをどの程度認識しているかによって、言葉やイメージの伝え方が大きく違っていくことを体験できた。

レポート：「ろう学校での創作活動」

講師は、自身も生まれつき全聾の障害をもつ、浅田香苗さん。

今回、レクチャーを受けに来られた参加者の中には、日常的に聴覚障害のある人のサポートをされている人も数名おり、浅田さんの障害経験も交えた説得力あるレクチャーを真剣に受けていた。また、大阪の手話サークルつくしより、2 名の手話通訳者にサポートに入ってもらった。

浅田さんは、聴覚支援学校における美術教育の意義を「自分の思いを表現すること」「主体的に他者と関わること」「様々な価値観に触れて自分の世界を拡げること」「自己肯定観をもつこと」だと言う。浅田さんによると、思春期を迎えた聴覚障害のある人は、障害のある自分を見つめ他者との比較をはじめめる。けれども、ほとんどの生徒は「将来、聴こえる人たちとともに働き、生活したい」と考えている。どうしても、聴こえないから視覚に頼ってしまう生徒たちだが、コミュニケーションの手段は、「見る」ことだけじゃないよ、と美術の授業で生徒が「人と話す」ことを通して、自らの価値観をつくりだすことを期待している。まさに浅田さんの考える美術教育の意義を具体化した実践がなされている。

浅田さんが教える支援学校の美術の授業では、2～5 人のグループという少人数での対話型美術鑑賞に力を入れている。「見る」「考える」「感じる」「話す」「聞く」を先生と生徒、生徒同士で美術鑑賞を通して深めていく。レクチャーでは、具体的な対話型美術鑑賞の方法について、参加者といくつかの事例をもとに体験することができた。

「ろう学校での創作活動」参加者の感想

- ・大学で特別支援教育の勉強をしていたが、進路を決める際に諦めてしまった経験があり、現在は会社員をしている。障害と関わる仕事がしたいという気持ちは持ち続けていて、前向きに考えたいと思っている。今日先生から学んだことを活かせるよう頑張りたい。
- ・耳の不自由な方の美術教育に触れるのは初めてだったので、100%だった私の未知度が少し減ったような気がする。
- ・障害者と健全者の壁を取り払いたいと思っている。絵画、造形の世界ではあまりないと思うので、今回のレクチャーに参加して、私の世界も広がったように感じる。
- ・現在、肢体不自由の子どもたちの学習サポートをしている。重度障害のある人が増える中、どんな制作活動や美



術の授業ができるかなと日々考えながら、授業づくりをしているので、今日のお話で色んなヒントをもらえたように思う。

- ・ 耳が聞こえる、聞こえないにかかわらず、芸術の鑑賞は自由で子どもの感想って面白いなと思った。手話や筆談、口話などのコミュニケーションの手段もさまざまで聞こえない人にとっても聞こえる人にとっても、お互い無理なく分かりあっていけたらと思う。
- ・ ろう学校での授業の内容や鑑賞の様子を聞けて、とても有意義だった。美術を通して個性を尊重する考え方など、浅田先生の取り組み方がとても素晴らしいと思い、浅田先生と出会えた学生さんはとても幸せに思う。
- ・ 子どもたちの表現方法を色々知ることが出来た。カメラを使った方法、そして子どもの言葉や気持ちを伝え、それを大人が作りあげていくという方法、子どもたちが自分でしたいという気持ちをたくさん重ねていくことが大切なのだと感じた。
- ・ 自分や自分の周りに聴覚障害者の方はいなかったのですが、今までは一般論としてバリアフリーだとか障害支援を考えたことしかなかったけれど、大学で聴覚障害者の知り合いができたり、今回の話をきいて、より身近に真剣に考えるようになった。

3. 創作サポート

4つのオープンアトリエの実施に際して、その場を「アートサポーター」養成講座のプログラムの一環とした。創作プログラム実施において重要な考え方やプログラムのつくり方、準備物、サポートの仕方、創作記録の取り方、注意点などを、準備、実施、片付け、振り返りの一連の運営のなかで学べるような研修の組み立てを行った。アートサポーターの参加人数は計19名。(プログラム詳細は15ページ～30ページ参照)

レポート：

2014年度はさまざまなレクチャーや体験型のワークショップなどの研修を行い、「意識を変える」「知らない情報を知る」「先駆的事例から学ぶ」などを目的としたが、さらに具体的な支援方法について学ぶには実地で学ぶことが必要ではないかと考え、今年度はオープンアトリエにアートサポーターとして入ることで、準備から振り返りまでを連続的に学べる講座を行った。この講座を通して、複数でアートサポーターとして関わることで互いに情報交換したり、ネットワークが生まれるといった成果があった。



「mirumiru」アートサポーター感想

- ・ともすれば材料がそろっているのが「あれもこれも」と勤めがちだが、制作者の様子を見ながら、というのが難しかった。画材の知識も必要だが、それ以上に制作者の呼吸に合わせるのが課題。
- ・サポーターの立ち位置がどのあたりなのか？ギリギリラインがきつとあるのだろうなと感じた。例えば画面いっぱい青の絵具を刷毛で塗られたある参加者の場合だと、「青一色で変化がないから、絵具を混ぜて渡す時点できれいに混ぜてしまわず、ムラになるようにしておこう」「前もって画用紙にマチエールを付けておけば、もっと面白い作品ができるのでは」などと、段々自分の作品として立ち入っていく自分に気づいた。サポーターの手助けが必要な人ほど横に立つ人は何をどう手伝うかに気遣いが必要だと感じた。
- ・美術に対しての知識はあるが、障害のある人に対するサポートの仕方がよく分からず、頑張ったが、今のままで良いのか分からない。これからは、そういう事も学ぶ必要性があると感じた。
- ・特に言葉のやりとりが難しい参加者に対して、ゆっくり時間をかけないとできないことと、4回講座の中でもできることを考えるのが難しかった。日常を全く共にしていない人なので、講座の中では本当に一側面しか見られない。普段からその方と接している親御さんたちとの連携も重要だなと感じた。
- ・その日初めてお会いする方をサポートしていくというのは、難しいことではあったが、短い時間の中で、少しずつ歩み寄ってみたり、距離をとってみたりと、お一人お一人に対してこちらが努力できたことは、とても良い経験になった。今回のように、同じ方のサポートを続けていた方が、その方への環境づくりがしやすく、制作して

いる側も安心できるのではないかと思う。

- ・先生を含めてサポーターだけでの話し合いは、必要だと感じた。サポートについてこれでいいのかな？の思いや戸惑いがあったが、講座を通して、私自身も障害のある子どもを持つ親として同じ想いで同じことを一生懸命出来る空間、自分のことを認めてくれる人がそばにいる空間が、（障害のある）息子にとってもとても力になり、ストレス発散になるということが、はっきり分かった。

「わくわくポン！」アートサポーター感想

- ・過程がステップごとに分かりやすかったのと、1回目のパラシュートは簡単で作りやすく全員が楽しめていたなと思った。カラフルなボンボンの重りで重さを変えられるのも、子どもたちの興味をひいていて良いアイデアだなと思った。
- ・2時間のプログラムで参加者にはその時間を有意義に楽しんでもらうことに集中していたので、出来上がってくるものに、思いもよらぬ面白さが見いだせた。そういった「偶発性」のようなものが面白いと思った。
- ・事前に、もう少し参加者の好きなものなどを聞いておけると、より関係性が深まったのかな、と思う。
- ・できれば事前にメールなどのやり取りが講師とあり、そこにサポートのポイントなどが書かれていると、自分の役割が見えて取り組みやすい。「サポートしたい」という気持ちで来る人が、「何もできなかった」と感じてしまわないような、ポイントを見えるようにしておくといいと思う。

「印象のまなざし」アートサポーター感想

- ・自由につくることを見えない人に対してするサポートは、結構難しいと感じた。
 - ・視覚障害のある人に接するのは初めてで、どの程度言っているのかよくわからず、つかずはなれずの距離感をもった。「楽しかった」と言ってくれていたので結果としては、よかった。
 - ・色を伝えるのが難しかった。どうしても主観になってしまうのだが、実際はズレがあったのではと思う。
 - ・声かけの仕方がワンパターンになってしまった。
 - ・相手が集中しているので、声かけが適切なタイミングでできなかった。
 - ・普通に自分自身も楽しみながら、一緒に創作活動ができた。相手が自分の持つイメージを言語化してくれて、それぞれの感性が見られて楽しかった。
 - ・サポーターとして参加させて頂いたワークショップだったが、自分も一参加者としてしっかりと参加する事ができて、とても有意義だった。初めて会った他の参加者と展示作品を見たり、曲をつくったりと日常ではできないことを体験することができ、とても楽しかった。
- 思ったことが曲になりすごいと思った。

「ふれあう大地のおすそわけ！」アートサポーター感想

・サポーターの学習会があればと思う。

4. アートと著作権について学ぶ研修

6W2H で考える、障害のある人のアート活動と著作権 —つくるとき、みせるとき、うるとき—

内容

福祉施設でのアート活動が盛んになるにつれ、アート活動に関する権利についての悩みを抱えている人も増えている。著作権は、いつ、どのように発生するのか。作品は、誰のものなのか。

専門家の話や具体的な活動の事例を通して、作品が生まれてから、展示や販売までの過程で発生する著作権や所有権などについて学んだ。また、実際に使えるチェックリストやガイドラインを共有し、各現場にあったアレンジを考えた。



日時：基礎編 3/15（火）18:00～20:00 応用編 3/22（火）18:00～20:00

会場：たんぼぼの家アートセンター HANA（奈良県奈良市）

講師：田中啓義（弁護士、登大路総合法律事務所所長）、藤井克英（たんぼぼの家アートセンター HANA ワークプログラム・コーディネーター）

進行：森下静香（一般財団法人たんぼぼの家常務理事）

4-1、基礎編（著作権、所有権の基礎知識）

著作権・所有権とは、どのようなものなのか。その基礎知識を学ぶ。作品は生まれたときから、権利に関わる。作品をつくる前に確認すべきことを明らかにし、ともに考える。

4-2、応用編（著作権、所有権の応用知識）

著作権・所有権とは、どのようなものなのか。その応用知識を学ぶ。作品を、発表するとき、販売するとき、商品化するとき、すべてのシーンに権利が関わってくる。条件によって取り決めるべきことを明らかにし、ともに考える。

レポート：基礎編

参加者は奈良県外からの方も多く、テーマに対する関心が高いことがうかがわれた。

前半は、田中弁護士を講師に迎え、障害のある人とアート活動をおこなううえでの著作権の基礎について学んだ。田中さんはご自身のこれまでをふりかえりながら、「著作権は知的財産権と言われ、特別な人のためのものと理解されがちだけれど、障害のある人や、立場の弱い人にとってこそ重要な権利だと思う」と話をはじめた。また「障害のある人の著作権を最大限尊重することが大切だけれど、加えて福祉施設など事業所の貢献度の適切な評価も大切」との言葉も印象的だった。著作権と所有権の違いなどについて、具体的な例を挙げながら伝えてくださったこともあり、質疑応答の時間には、福祉施設でアート活動に取り組む参加者から、「コラージュの著作権はどう考えたらよいのか」「雑誌・写真集などを見て絵を描くことも多いがその場合の著作権は…？」などの質問があがった。

また、後半はたんぼぼの家の藤井より、実際にたんぼぼの家で作成中の「アート活動における著作権の取扱規定」「アー

ト活動における作品の権利にかかる合意書」が例として紹介された。規定や合意書をつくる際には、施設のアート活動や福祉に対する考えが反映されることが大切とのこと。今回たんぽぽで書類をつくる際に注意した点や、議論になった点などが共有された。合意書では、書類そのものがわかりやすくなるように、やさしい言葉の注釈が入れられているという工夫も。また、著作物に売上が発生した場合の賃金の支払いについても具体的に触れられた。質疑応答の時間には、作品の価格設定の方法についてや、著作者ご本人が合意書等にサインをかけない場合（身体的にまたは判断が難しい場合）にはどのようにすればいいかといった質問があがった。

参加者が、漠然と話を聞くのではなく、普段現場で気になっていることや疑問に思っていることを持った状態で参加されていたため、質問も具体的になり、より現場に即した内容になった。



「基礎編」参加者の感想

- ・著作権・所有権についての知識はほとんど皆無と言っていい程だったので、この基本の「き」を受講させて頂いた事でこれからの制作活動を学校で続けていく際の参考になりました。私にすればはじめての一步！でした。
- ・具体的な合意書、規定など大変参考になりました。
- ・本当に知りたかった事でしたので、とても有意義でした。
- ・著作権は人権というお話が心に響きました。私たちの団体では今まで強く意識していなかった分野なので、今後は障害のある人の権利を守るためにも勉強していきたいと思います。

レポート：応用編

はじめに、たんぽぽの家の森下より、これまで障害のある人のアート作品を扱う際に、「著作権は大丈夫か？」と感じた事例がいくつか挙げられた。「写真集の写真を模写した絵画作品を販売することは可能か？」「特定の商品名が入っている文字作品を商品化してもいいか？」など。考える際に重要なポイントのひとつは、つくられたものが、参考にしたものの特徴やこめられた感情思想をどれほど残しているものかということ。ふたつめは原著作物のイメージを悪くしたり、財産を侵害することがないかということ。事例に対しては参加者全員で頭をひねる場面もあり、田中弁護士からは「誰かが答えを持っているというものではないので、考えることが大切」という言葉が聞かれた。

次に、障害のある人のアートを、広告や商品のデザインに使用することを仲介し仕事につなげている「エイブルアート・カンパニー」についての紹介があり、デザインとして使用される場合、商談発生から最後の著作権使用料の支払いまで、

こういった手順が踏まれるのかを知る機会となった。

また現在、たんぼぼの家でメンバーが制作した作品が販売された場合、給与にはどう反映されているのかが示され、原材料費や必要経費をどう考えるかなど、かなり具体的なところまでが明らかにされた。スタッフからは「本当なら作品が売れた時には、お金はそのメンバーさんにすべて返したい」という声も聞かれたが、売れなかった期間や販売できない作品にかかった材料費等を考えると作品単位では決められないという声もあった。

行き過ぎた資本主義社会に対して、福祉施設だからこそその考えができるのではないかと（作品制作をした一人だけにお金が入るのではなく、その環境をともにしたメンバーにも配分されるなど）という話も出て、まさに、施設の考え方が問われるところだということがわかった。さらに、その考え方をスタッフもメンバーも保護者も、しっかり共有できるように言語化をすることが大切なのではないかという意見もでた。

「応用編」参加者の感想

- ・施設で規定を定めようとしていたので、今回のお話はとても参考になりました。今回のお話を施設に持ち帰り、施設の考えを組み込みながら規定を決めていこうと思いました。
- ・最後のできれば全てを利用者さんに売り上げを渡したいというお話、とてもよくわかりました。利用者さんにとってよりよくしていけるようもっと考えていきたいと思いました。
- ・「施設の哲学がとわれる」という事を聞いて、つねにどうあるべきかを考え続ける課題だと思いました。良いお話がきっかけでした。
- ・施設における給与等金銭を伴う規定等の設定は、施設を運営していくことと作者の人権を守ることの両面を考慮していかなければならない難しさを感じました。特に作者に金銭的な判断能力があまりない場合は、色々なケースを考えていく必要がありますよね。
- ・実際の事例でとてもよく分かりました。またわからないがゆえにガチガチに考えていましたが、もっと柔軟に考えても良いという事がわかりました。

4

今年度事業における課題と提案

たんぽぽの家では、厚生労働省「平成 27 年度障害者文化芸術活動支援事業」において、以下の点に力点と目標をおき、事業を行ってきた。

- ① 学校卒業後の芸術活動のサポートの場づくりのための調査及び試行プログラムの実施
- ② 多様な障害のある人に対応する支援方法の研修
- ③ 奈良県東部、南部への調査やネットワークづくり
- ④ より多くの人に障害のある人の表現に触れてもらう機会づくり
- ⑤ 調査や研修を通して、奈良県内の取り組みにとどまらない全国的な提案

ポストスクールに関する養護学校および、地域の絵画教室への調査、東南部地域への調査、オープンアトリエの実施、アートサポーター養成講座、各種レクチャーなどを行った。また、研修事業のなかで、今年度新たに「多様な障害のある人の創作活動を学ぶ」と題し、盲学校、ろう学校での創作活動について学ぶことができる研修を設けた。

事業を実施するなかで最も実感したのが、障害のある人が、芸術活動をしたいと思ったときにいつでも始められ、そこに居場所を見つけたり、創作活動を通して人との関わりが増えていったり、生活そのものがより豊かになるような仕組みの重要性である。障害のある人の選択肢を増やしていけるように、アートサポーターといわれる支援者を増やしていく取り組みも必要だということがうかがえた。これらの取り組みは、障害のある人の社会参加のメニューを増やすことにもつながるだろう。

オープンアトリエの実施について、今年度は奈良県内の 4 カ所の地域において、試行的なプログラムとして対象者や講師、日程、会場など異なる条件のもとで行った。異なる条件で開催したことで、地域でのプログラムのニーズやプログラムを成り立たせるために必要な条件等が明らかになった。地域で開催するプログラムでもっとも大切な要素の一つが会場であるが、①地域の公共施設をかりる、②福祉施設の休日やあいているスペースを使用する（施設にとっても地域とつながる機会となる）、③カフェの一角を利用するなど、少しの工夫やアイデアで会場がみつかることが明らかになったため、今後こうしたアイデアを福祉分野の人ともアート活動をしたい人とも共有していくことが必要だと思われる。たんぽぽの家としては、今後、ハンドブックやウェブ等で情報提供していきたいと考えている。

今年度の事業を通して、以下の提案を行うとともに、引き続き、たんぽぽの家としても地域でのアート活動の広がりをめざして活動していきたい。

・オープンアトリエのような取り組みを各地にひろげる。

養護学校への調査において、学校卒業後の余暇の使い方や個人的な芸術活動が続けられなくなってしまうことの懸念も聞かれた。安定した就労生活を送ろうと思えば、趣味を充実させることは一つの大事な要素となりうる。ただ、現状としては、障害のある人が気軽に通うことができ、居場所となりうるような絵画教室のような場所がほとんどないため、オープンアトリエのような取り組みを各地にひろげることが必要である。

プログラムや日時、会場などが異なった、複数のオープンアトリエがあれば、障害のある人にとって芸術活動が続けられる環境がより整うのではないだろうかと思われる。また、障害のある人だけでなく、障害のない人や子どもなど、多様

な属性をもつ人たちが集まれるオープンアトリエや展覧会などがあればよい。また創作活動を伴わないサロンのような場も有効であると思われた。

・アートサポーターの養成プログラムのシステム化

障害のある人が、地域で芸術活動が続けていくために、アートサポーターの協力はとても心強いものとなる。

しかし、現状として、アートサポーターの養成のプログラムについてシステム化がされていないため、個々のアートサポーターの力量に依存する部分が大きく、迷いもあることが見て取れた。プログラムのシステム化と、アートサポーター同士で相談し、話し合える環境が必要である。

今年度の事業の中で、施設の職員、地域でアトリエを主宰する人、障害のある人の家族、学生などが自分のできる時間やできることでアートサポーターとして障害のある人の創作支援に関わりたいと考えていたことがわかった。今回は、養成講座の一環として実際のオープンアトリエの現場での支援に関わってもらい、可能な限り 1 回ごとに振り返りの時間をもった。複数人で 1 つのオープンアトリエのアートサポーターとして活動することが、互いに情報交換したり、ネットワークが生まれることもわかった。

こうした人がアートサポーターとなって登録、派遣できる仕組みができると、地域や福祉施設でのアート活動の機会を増やすことができると考えるため、今後検討していきたい。

・多様な障害のある人に対する支援方法の模索

今年度の事業の中で、視覚に障害のある人、聴覚に障害のある人に対する美術教育の実態についてのレクチャーを、現場の教員が講師となって行った。参加者からは、初めて聞く学校現場での取り組みについて、驚きとともに興味や関心を多く引き出せたようである。レクチャーを行った講師が働く学校現場の見学を希望する人も何人かいた。まずは、「知る」こと、そこからこれまで出会ったことのなかった障害のある人との関係性が始まるきっかけになることがうかがえた。このようなレクチャーは、大変意義があると思われる。

学校卒業後の障害のある人の地域での表現活動に関する調査と実践

発行日：2016年3月31日

発行元：一般財団法人たんぽぽの家

〒630-8044 奈良市六条西 3-25-4

Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501

Email tanpopo@popo.or.jp

URL <http://tanpoponoye.org/>

編集：太田啓子、岡部太郎、賞雅裕子、森下静香

協力：池崎多佳子、大井卓也、虎頭加奈

撮影：衣笠奈津美、たんぽぽの家

*本書は「平成27年度厚生労働省障害者の芸術活動支援モデル事業」の一環として制作しました。



障害とアートの相談室

Email artsoudan@popo.or.jp

URL <http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

一般財団法人たんぽぽの家

〒630-8044 奈良市六条西3-25-4 Tel.0742-43-7055 Fax.0742-49-5501 E-mail.artsoudan@popo.or.jp <http://tanpoponoye.org>